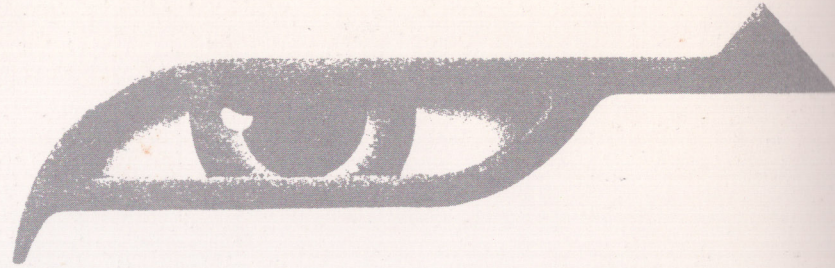
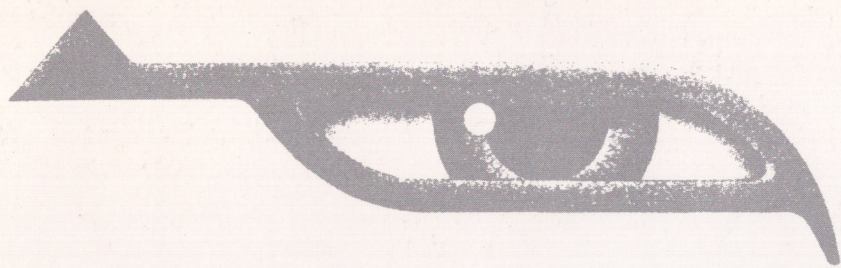


ASIA JAPAN TOUR 1983





AIROA

日本公演

12月6日/東京 武道館大ホール

主催■文化放送/ウドー音楽事務所

12月7日/東京 武道館大ホール

主催■文化放送/ウドー音楽事務所

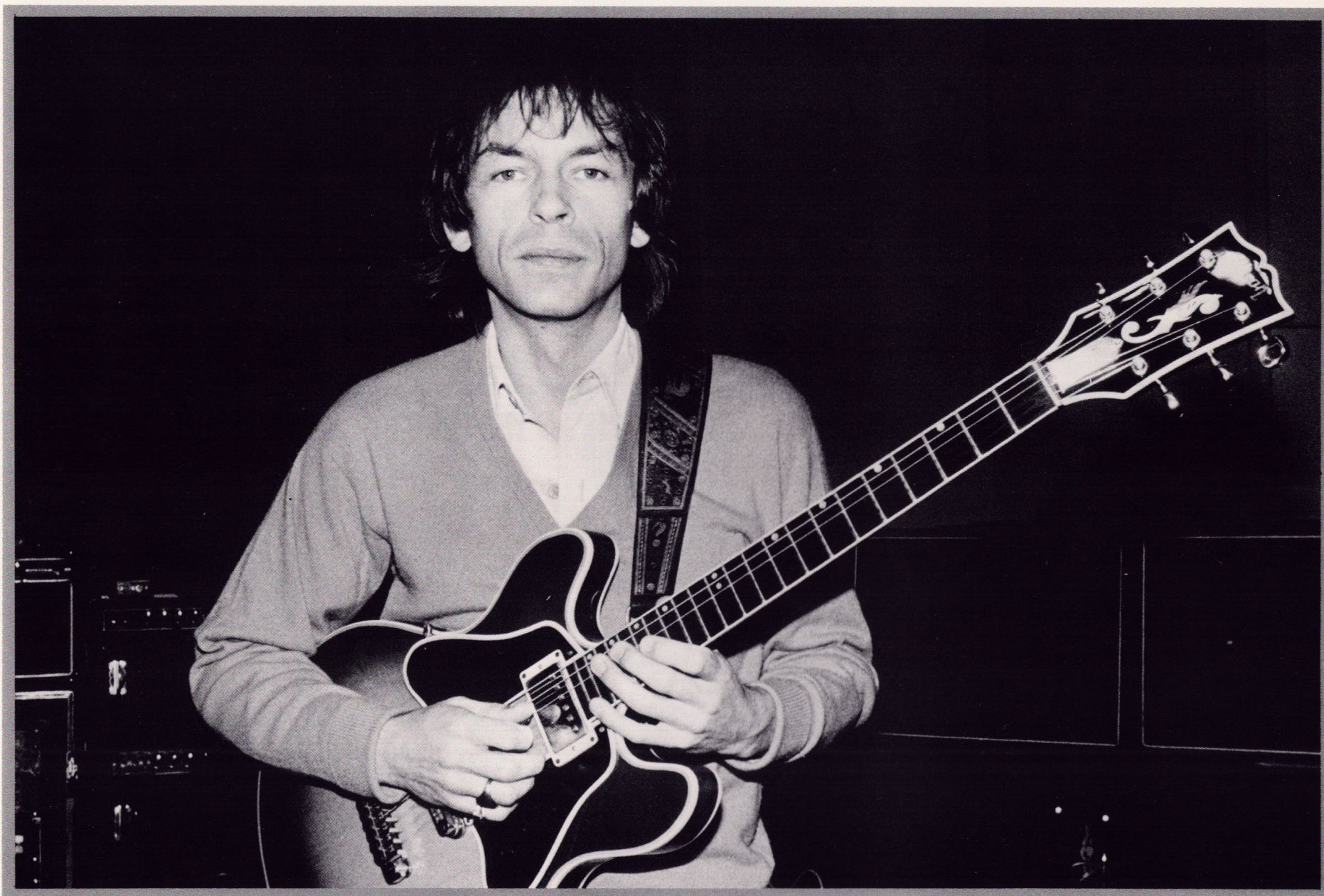
12月8日/東京 武道館大ホール

主催■文化放送/ウドー音楽事務所

12月9日/大阪 大阪城ホール

主催■FM大阪





スティーヴ・ハウ(G)

70年代にハード・コアの世界的なギタリストがいた。ロック・ギタリストの5指に入る程の腕前を持ったスティーヴ・ハウは、常にロック・ギターの新しきテクニックやスタイルを開発してきた数少ないロック・エリートだ。

1947年4月、ロンドンに生まれた彼は、両親が今も住む小さなアパートで育った。少年時代はミリタリー・バンドの音楽を聞いていたが、12歳の時にビル・ヘイリー&ザ・コメッツのレコードを聞かされてからというもの、ロックン・ロールに狂い始めた。その年にギターを手に入れ、数ヶ月後には近所のユース・クラブでプレイするようになった。

15歳の頃、彼は兄の影響を受けてジャズに興味を持ち始め、その後、クラシック、ブルース、スパニッシュなどのギター・スタイルを学び、身につけていった。17歳になって、学友と「シンディキャッツ」というポップ・グル

ープを結成し、一年後にプロとしてスタートする。そして、「ジ・イン・クラウド」というバンドを作り、何枚かシングルを録音。後にグループは「トゥモロウ」と改名するが、2年後には解散してしまう。69年にイエスのベーシスト、クリス・スクワイアからグループに加入しないかと勧誘されたスティーヴは、ピーター・バンクスの後釜として『ザ・イエス・アルバム』をレコーディングする。以後、10年間、彼はイエスのメンバーとしてトップの座を守り続ける。

グループが解散した81年初め、彼は新しいチャレンジを試み、より鋭く論理的にコントロールされた音楽を目指して、エイジアを誕生させた。驚異の早弾きギター、そして時には物悲しく、またストレートでワイルドなギター・プレイを披露するスティーヴは、エイジアを確固たる方向性を持ったバンドに仕立て上げたのである。



カール・パーマー(Ds)

エマーソン・レイク&パーマーで世界的なドラマーとしての名声をはせたカール・パーマーは、1950年パーミンガムのクラシックの血筋をひく音楽一家に生まれた。少年時代、バイオリンを勧められたが、ある日、店のショー・ウィンドウに飾られていたオモチャのスネア・ドラムを彼が見逃していたら、プリティッシュ・ロックの歴史は大きく変わっていただろう。

ダンス・ホール・バンドでの活動を経て、“The King Bees”というグループで初めてロックン・ロールを演奏した彼は、その後、ギタリストのアルバート・リー、ヴォーカリストのクリス・ファーロウと“Thunderbirds”を結成する。だが68年5月、“The Crazy World of Arthur Brown”に参加する為に脱退。しばらくの間、アーサー・ブラウンと行動を共にするが、商業

的な成功を求めて、オルガニストのヴィンセント・クレインとバンドを脱退し、69年にロック・トリオ、“アトミック・ルースター”を誕生させる。

シングル「13日の金曜日」でデビューを飾ったルースターだが、その頃、キース・エマーソンはナイスに終止符を打って、グレッグ・レイクと新バンドを始めようとカールに誘いをかけてきた。彼はその申し出を受け、結局1年足らずでルースターを脱退。そして、70年夏、エマーソン・レイク&パーマーはスタートした。

史上最高のロック・トリオの声高く、E L & Pは全世界で人気を集め、このトリオで彼は10年間のドラム人生を送ったが、グループ解散後、第2のスタートとしてE L & P同様のビックなバンド、エイジアで活動するというのも、彼の運命のめぐり合せともいえるだろう。



ジェフリー・ダウンス(Key,Syn)

1952年、ストックポート生まれ。教会のオルガニストの父親と、ピアノ教師だった母親のもとで、子供の頃からポップ・ミュージックに親しんでいた彼にとって、エイジアのようなビッグ・バンドでプレイすることは運命づけられていたことといえよう。

ジェフリーがはじめてハモンド・オルガンを手に入れたのは16歳の時、「She's French」というバンドで地方の大学を回り、ヘッド・ライナーをつとめていた。75年にロンドンに移り、オーディションを受けて「Wizzard」、「Tina Charles Band」で活動をするようになり、そこでトレヴァー・ホーンと出会う。

2人はスタジオにもってキーボードとシンセサイザーによるエレクトロニクス・ポップ・ミュージックにとり組んだ。そして、79年に「ラジオ・スターの悲劇」という曲で2人は「バグルス」として本国はじめヨーロッパの

ヒット・チャートを荒らし回った。

だが、「バグルス」の将来に見切りをつけた2人は、翌年に、何とイエスを脱退したリック・ウェイクマンとジョン・アンダーソンの後を受け継ぐという勇気ある決断をする。それは一部の伝統的イエス・ファンを侮辱することにもなったが、一方で、スティーヴ・ハウとジェフリーは音楽的にすばらしい相互関係を見出し、それによってジェフリーは計画段階にあったエイジアの有力な候補となった。

エイジアでの成功はとてつもなく早くやって来た。バンドの他のメンバーほど経験が豊富でないことから、彼は未だにステージ上で不安を感じることもある。しかし、事はすべての面で満足のいく状態で進行しており、そのプレイには、他と互角にわたり合うに十分な貫禄すら漂っている。



グレッグ・レイク(B,Vo)

1947年、バードンマウス生まれ。幼い頃にピアニストだった母親から中古のギターを買ってもらったのをきっかけに音楽に興味を抱き、ギターの練習に励む日々を送る。地元のセミ・プロ・バンド等における活動を経て、ケン・ヘンズレー等の在籍する“ゴッズ”に参加、ギターをベースに持ちかえる。

68年に、以前一緒にプレイをした経験を持つロバート・フリップの紹介で、キング・クリムゾンのメンバーとなるが「クリムゾン・キングの宮殿」と「ポセイダンのめざめ」の2枚のアルバムに参加した後に脱退。そして、70年夏、キース・エマーソン、カール・パーマーと共に“E L & P”を結成し、スーパー・グループとして話題をさらった。シンセサイザーの導入による画期的な音作りをはじめ、サウンドの要としてグレッグの果たした役割は大きく、10年に及ぶ活動の中で彼は多くの信奉者を

つかんだ。

“E L & P”が自然消滅後の81年夏、レディング・フェスティバルで突如第一線にカム・バック。3人の中で彼は早く活動ののろしを上げ、人気ギタリスト、ゲイリー・ムーアと組んだプロジェクトは、ロック・ファンを大いに沸かせた。暮にはゲイリーとの共演による復帰第1弾「グレッグ・レイク&ゲイリー・ムーア」を発表。

そして、今年の10月にはその第2弾とも言うべき『マヌーヴァーズ』を発表したが、直後、初来日を前に突如脱退したジョン・ウェットンの替わりにエイジアに参加。その豊かな才能、魅惑的なヴォーカルは、83年、エイジアのものとなった。



イギリスのスーパーグループ、エイジアのアメリカでの評価

by

福田一郎 ICHIRO FUKUDA

アメリカのミュージック・クリティックは、既成のビッグ・スターに冷たく、というよりは関心が薄く、気鋭のニュー・スターには暖かく、興味を示すような傾向にある。とくに、ロック・クリティックと呼ばれる人たちは、こうした傾向が強いようだが、そうしたニュー・スターが、商業的な成功を収め、ポピュラーになると、今度は逆に、嫌いになり始めるようでもある。ロサンゼルス新聞にのったエイジアのコンサート評を見ると、ロック・クリティックの心情、音楽的態度とでもいうものが、はっきりとあらわれているようで、面白い。

“ロック・クリティックたちは、あるバンドがポピュラーになるやいなや、そのバンドを嫌いになり始めるといわれるが、それは事実ではない。エイジアを考えてみるといい。クリティックたちは、バンドがポピュラーになる以前に、もう嫌いになり始めていたのだ。”

これは、エイジアが、82年6月、サンタ・モニカでコンサート出演して、ロサンゼルス地区ヘデビューを飾ったときの評の書きだして、実にきびしい。もう少々引用すると、

“さて、70年代初期の、特徴を欠いた、自意識過剰の似非芸術性の再来を、この80年代に誰が望んでいるだろうか？ 答は、明らかに、イエスだ。エイジアの2回のサンタ・モニカのコンサートの入場券は、グループの最初のアルバムが、レコード店に到着する前に、すべて売切れた。……”

こんな調子で続き、なんともひどい言われ方なのだが、この程度の酷評は、ごく当たり前で、珍しくもない。最近でいえば、ジャーニー、スティクスあたりのコンサート評も、かなりきびしかった。脱線するが、スーパーグループの1つ、カンサスは、ロサンゼルスで公演するたびに、こっぴどく叩かれている。いつだったか、カンサスのマネージャーに会ったとき、あなたはクリティックなのだから、分か

るだろう、どうしたら、好意的な批評を書いて貰えるのだろうか、真顔で、そう質問されて、返答に困ったことがある。

このエイジアのコンサート評は、読者にショックを与え、ちょっとした騒ぎとなったようである。とくに、“70年代初期の、特徴を欠いた自意識過剰の似非芸術性”という部分は、かつてのスーパーグループ、イエス、ELPの音楽を悪し様に表現したものとして、イエス、ELPの熱烈なファンだった人々を怒らせるに十分であった。

当然の結果、読者からの賛否両論の手紙が新聞社宛に集まってきた。多くは、怒りと不満の抗議の手紙だったそうだが、とにかく、反響のすさまじさにこたえて、再びエイジアを取り上げ、何人かの手紙からの抜粋を紹介した。そのなかには、当のクリティックの音楽的な好みに対する、個人攻撃さえのせていて、このあたり、いかにもアメリカ的で面白い。

勘ぐってみると、これはやらせと思われなくてもいいが、酷評にしろなんにしろ、コンサート評と合わせて2回も、エイジアの記事を写真入りで大新聞が取り上げたという影響は、大きい。業界には悪評も宣伝のうちという考え方もあるし、とにかく、エイジアの宣伝に関していえば、かなり効果的であったといえる。

このロサンゼルス新聞は、その後、82年度のベストセラー・アルバムという特集記事を発表しているのだが、ナンバーワンとして認定されたのは、エイジアの『詠時感』である。J・ガイルズの『フリーズ・フレイム』、GO・GO'Sの『ビューティ・アンド・ザ・ビート』、ジョン・クーガーの『アメリカン・フル』、ジャーニーの『エスケイプ』などのベストセラーLPを押さえてのトップは、特筆に値する。そして『詠時感』の大ベストセラーと、エイジアの全米コンサート・ツアーの成功は、不況ムードのアメリカのレコード、コンサート業界に、刺激と

活気を与えたといえる。

『詠時感』のベストセラーにまつわる、業界の泥仕合話を紹介しておく、エイジアのデビュー・アルバムは、82年最大のベストセラーというのは、アメリカのレコード業界関係者の大多数の意見であったわけだが、これに異論をとらえたレコード会社があった。一つは、ポリグラム・レコードで、ジョン・クーガーの『アメリカン・フル』こそ、82年最大のベストセラー・アルバムと主張したため、『詠時感』のアメリカでの販売を担当するワーナー・レコードとの間に、売上げ枚数での泥仕合までに発展した。さらにはモータウン・レコードが、これに加わって、ライオネル・リッチーの同名のアルバムこそ全米1位のベストセラーで、エイジア、ジョン・クーガーよりも売れている、ビルボード誌のアルバム・チャートに間違いがあると噛みついたため、ビルボード誌のえらいさんが意見を述べるなどという騒ぎにまで発展したものである。

エイジア、ゲッフィン・レコードの関係者と会って、興味深かったのは、イギリス人たちのスーパーグループを、アメリカのレコード会社が直接契約したという事実である。これまでだと、イギリスのレコード会社を通じて、アメリカのレコード会社が契約するというのが普通で、エイジアのケースは、ちょっと珍しいらしい。それともう1つ、エイジアの成功に刺激されて、クリス・スクワイア、ジョン・アンダーソンたちが、新しいスーパーグループをつくる計画があるという話を耳にしたが、それはどうも、今度のイエス再編となって現われたらしい。

セカンド・アルバム『アルファ』を発表してからのエイジアのアメリカでの反響などについてだが、突然のジョン・ウェットンの退団と、グレッグ・レイクの参加、さらにMTVを通じての日本・武道館公演の同時中継放送などとあって、現在の時点では、ふれるには時機尚早のようである。

アメリカに接近して大成功を収めたイギリスのバンド

by

水上はるこ HARUKO MINAKAMI

いったい、どんな観客が集まるのだろうか…。8月末、アメリカのニュージャージー、フォーラムで催されたエイジアのコンサートに向かいながら、半分楽しみでもあり、半分不安でもあり、という奇妙な気分だった。何しろ、その時のメンバー全員の在籍したグループ名を挙げるのに、両手の指を全部使わなければならないほどの超ベテラン・ミュージシャンたちによって結成され、最初の大かたの思わくを軽くいなして、ものすごい勢いでレコードを売りまくっている最中のエイジアだ。ところが会場について驚いた。確かに、私と同年輩の、元若者の姿もチラホラみえる。中には12~13才の子供とおぼしき少年と一緒に親父もいて、ほほえましい光景にぶつかったりする。しかし、大半は10代後半から20代前半の男性。意外や意外、ヘヴィ・メタル・ファンが多かった。(彼らはたいてい、アイアン・メイデンやデフ・レパードのTシャツを着ているのですぐにわかる)

さて、ステージはどうか、というと、最初から1万人収容のホールでのコンサートを狙ったと思われる、ヴィジュアルな面にも力を入れた構成で、しかも、それらの技術やパワーが、ごく自然に年輪を重ねて出てきたものだけに、演出の必要のない、ナチュラルなステージングになっていたのがよくわかった。エイジアはメンバーの全員がイギリス人であるけれど、その会場にいる限り、イギリスのバンドを見ているんだ、ということは頭の片隅にすらなかった。私はスティーヴ・ハウのイエス、カール・パーマーのEL&P、ジョン・ウェットンのキング・クリムゾン、ロキシー・ミュージック(などなど)を見ていて、これらはまぎれもなくイギリスのバンドとして世界的に評価されてきている。あまりにも、イギリス的なこれらのバンドゆえ、アメリカにはついにコピー・バンドさえ出なかったほどだ。

3人がそれぞれのグループの頂点をきわめたのはかれこれ10年近くも前のことになるが、一時はパンク/ニュー・ウェイヴの波に押されて、その活動が精彩を失っていたのは事実だ。年令的にも30代の後半にさしかかった彼らが、大人にしかできないことをやろう、と一念発起した結果が、エイジアなのだ。

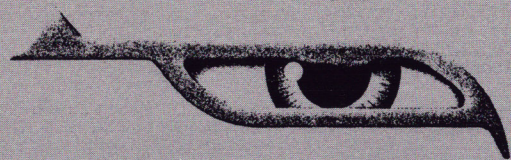
かつて、フォリナーというバンドが、メンバーの半分以上はイギリス人でありながら、舞台も音楽性もアメリカに基盤をおいた活動をしていたが、エイジアは、この2つのグループの名前が何かを象徴するかのよう、運命的に生まれた国への執着を捨て去るべきだとさっているのだろうか。

そもそも、イギリス人であること、イギリス人のミュージシャンであることは、彼らにとって何を意味するのか?精神的に、あるいは経済的に、彼らは自分の国籍にしばられるものだろうか?ジョン・ウェットンはグレッグ・レイクに代わったが、グレッグもまたキャリアとしてはジョンと同じ長さ、深さを誇るミュージシャンだ。

私たち日本人にとって、物心つくまで、「外国」とはひとつしかなく、すなわちアメリカやヨーロッパのことであり、アメリカやイギリスの文化や国民の精神構造に大きな違いがあると知るのには、学校の教科書で習うよりも、ロックをききはじめてから実感としてつかみとったからである。それ以来、ビートルズの全盛期にイギリスとアメリカの音楽文化は一時的に接近したが、アメリカにはモータウン、スプリングスティーン、マイケル・ジャクソンがあり、イギリスにはレッド・ツェッペリン、クイーン、カルチャー・クラブがあり、両国の個性はまたまた離れていったのだ。エイジアのレコードをきくと、スティーヴ・ハウのあのシャープな早弾きギターは健在だし、カール・パーマーの決めの大ドラもステー

ジの後ろにデンとかまえている。ジョン・ウェットンのヴォーカルは、ひかえ目ながら無理にシャウトしないところがほかのヘヴィ・メタル・バンドとは一線を画していた。グレッグ・レイクも、これまでに知る限りにおいては、声量のある、スローな曲を得意とするヴォーカリストだ。どこをとっても、エイジアは基本的にはイギリス人のバンドである。しかし、円熟、力量、自信、年輪、そういったものが下は12才から上は35才までの観客にアピールする魅力を発揮できるバンドへ導く要素となっているのだろう。そこが、カルチャー・クラブやデフ・レパードとはひと味もふた味も違うゆえんなのだ。

現在も、ばく然とした感触として「イギリス的なロック」「アメリカ的なロック」は確かにあり、エイジアの曲をきいて、これはイギリス人ミュージシャンによるグループだと言うのは比較的簡単だ。うがった見方をすれば、エイジアは、単に、限られたイギリスの市場に見切りをつけて、最初からアメリカの市場を狙ったのさ、と決めつけるのはたやすい。しかし、エイジアがここまで世界中でヒットした理由は、イギリス的なものと、アメリカ的なものの、幸せな結婚がずっと続いているからだと思う。



エイジアを形成する4人の音楽性

ある種の“ときめき”は感じられたにせよ、結成当初、たかが70年代プログレッシヴ・ロックの化石達と軽視される傾向にあった、エイジアのデビュー・アルバム『詠時感〜時へのロマン〜』が、ローリング・ストーンズやジャーニー、ポリスといった常連達を蹴落とし、米ビルボード誌 '82年度年間アルバム・チャートの首位をまんまと手中に収めることなど、一体誰に予測し得たであろう。思えば、ロック・ミュージック自体が立派に商品として成り立つまでに成熟した60年代末から、様々な意図により、幾多の“スーパー・バンド”と称される音楽集団が誕生をみたが、互いのエゴの衝突に火花を散らし、ごく短命に燃え尽きるのが常、エイジアほどの快挙は他に例を見ない。

その要因をたどれば、それぞれの輝かしいキャリアに決して甘んずることなく、稀に見るメンバー間の協調性を最優先、一貫して“わかりやすさ”を前面に掲げ、自らの手で苛酷な80年代を生き抜こうという潔さが存在する。だからこそ、先頃、繰り広げられたジョン・ウェットンからグレッグ・レイクへの突然の交代劇は、少なからずショックを与えたものだが、ともかく、この先、グレッグを迎えた新生エイジアが、いかなる偉業を達成するか、まさに興味は尽きない。ここでは、各メンバーのバックグラウンドや音楽性の移行をもう一度振り返ってみたい。

▲まずは、敏腕ギタリストの誉れ高いスティーヴ・ハウ。12歳のクリスマスに両親よりギターを贈られたのをきっかけに、本格的なプレイヤーを志すも、当時はレコードからのフレーズ・コピー、それも16ビートの早弾きを大の苦手とし、かろうじてメロディ・ラインのつま弾きでお茶を濁していたというから、全くもって信じ難い。そして、ザ・シンディキャッツ('63年末〜'65年8月)、ジ・イン・クラウド('65年8月〜'67年3月)、

トゥモロウ('67年3月〜'68年4月)、ボーダスト('68年5月〜'69年12月)といった、ロンドンをフランチャイズとする愛すべき弱小バンドとのレコーディングでは、まだまだ、ロックン・ロールやR&Bに根ざしたポップ色濃厚のギター・スタイルに終始。それらと並行して行なわれたロン・ウッドやエインズレー・ダンバーらとのデモ・テープ作り、あるいは、ナイスやジェスロ・タルの臨時ギタリストの座を通して、ようやくその個性的な持ち味を発揮するに至ったと思われる。

そんなスティーヴの独創性に富んだギター・スタイルは、言うまでもなく、イエス('70年3月〜'80年2月)加入と前後して、いっせいに開花。正式なレッスンを受けることなく、ひたすら独学に基づく実践だけをたよりに歩み続けてきた彼に、ひとりのシンガーをバンド全体でサポートするという、それまでの画一化された作業の繰り返しは、ソロとバックアップの同時進行をごく自然に促し、とりわけイエスにあっては、大仰なソロ・プレイとも単なるコード・カッティングとも即座に判断しかねる、複雑なリフの組み立てによって、サウンド進行そのものをぐいぐいリード。オクターブもなんのその、低音部から高音部へ、はたまたメジャーからマイナーへと自由奔放に駆けめぐる大胆なポジション・チェンジは、彼のトレード・マークのひとつとさえなった。また、C&W奏法、ジャズ奏法、さらには、クラシック奏法と、様々な音楽的要素を貪欲に吸収。同世代のブリティッシュ系人気ギタリスト達がこぞって傾倒したブルースからの影響、極論すればチョーキングをあえて拒否したところに、その叙情味溢れるファンタジックなギター・スタイルの秘密が潜んでいるのかも知れない。

一方、ヴォーカル・パートがメインとなるエイジアにおいては、さほど奏法に変化は見受けられぬものの、

サウンド進行に合わせ、ギター本来が持つメロディ楽器としての特性を強調、かなりオーソドックスなソロ&バックアップへと移行している点に注目したい。そのため、ともすれば物足りなさや単調さのイメージだけが先行しがちであるが、やはり本気でフル・コピーするにはこれほど厄介なギタリストもいまい。最後になってしまったが、ジャズ、クラシック、スパニッシュ奏法等を駆使してのアコースティック・ギターによる妙技も、彼ならではの大きな魅力のひとつだ。

■続いては、若きキーボード・ウィザード、ジェフリー・ダウンス。リーズのユニヴァーシティ・オブ・ミュージック・カレッジ時代、ウェザー・リポートやチック・コリア、さらには、イエス、EL&P等のコピー明け暮れるプログレ/フュージョン・タイプのスクール・バンド、ナサニアル・マウス('74年1月〜9月)やシーズ・フレンチ('74年9月〜'75年7月)に在籍、次いで卒業と同時にロンドンへと繰り出し、かのディスコ・レディ、ティナ・チャールズのバックアップを9か月に亘って務めたという経歴は、なかなか異色。そして、アイソトープ('77年)を経て、ティナを介して出逢ったトレヴァー・ホーンと、実験的なスタジオ・レコーディング・バンド、バグルス('79年1月〜'80年3月)を結成、「ラジオ・スターの悲劇」や「クリン・クリン」のビッグ・ヒットを放つに至る。

テクノ・ポップ全盛期に発表されたバグルスの2枚のアルバムにおいてジェフは、単なる無機質なシンセの機械音をそのままサウンドに反映させることを見合わせたかのように、キャッチー、かつ簡潔なメロディ・ラインをふんだんに用いて、ある時は複数のキーボードを的確に重ね合わせたユニゾンで、またある時はさりげなくも甘美なアルペジオによって、作品自体に豊かなヴァリエーションを提供。また、その後、トレヴ

by

伊藤秀世 HIDEYO ITO

ァーと共に身を投じたイエス('80年3月~12月)では、あのリック・ウェイクマンの後任という大役を意識してか、重厚なシンフォニック・タッチのプレイをも、いとも簡単にマスター。それはそのまま、現在のエイジア・サウンドの大きな要へと発展している。

噂のデジタル・シンセ、フェアライトCMIを始め、25種もの鍵盤楽器をあやつりながら、より臨場感溢れるホーン・セクションやストリングス・パートをドラマトニックに演出するジェフ。イギリス生まれにしては珍しく、派手なソロ・プレイより、むしろ柔軟性に富んだきめ細やかなアンサンブルを身の上とする堅実派の代表だ。

■三番手は、とりわけ日本にはなじみの深い人気ドラマー、カール・パーマー。そもそも彼とドラムスとの出逢いは、10歳の頃、地元バーミンガムにある楽器店のショー・ウインドに飾られていたドラム・セットの放つあまりの美しさにただただ呆然、無理矢理両親にねだって、首尾よくそれをモノにしたことに始まる。15歳で組んだザ・キング・ビーズを皮切りに、クリス・ファーロウ&ザ・サンダーバズ('67年2月~68年5月)、ザ・クレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウン('68年5月~69年6月)、アトミック・ルースター('69年6月~70年6月)へと参加、一心不乱にスティックを握り続ける。

だが、ELP(70年6月~78年12月)結成後もなお、彼のドラミングは、一向に上達する気配さえなかった。持ち前の不器用さが災いしてか、リズムの乱れやもたつき、ミス・トーンなどが目立ち、楽器の性質上、至し方ない点を割り引いても、今思えば、あれだけ多彩な演奏パターンを擁すあのELPの変拍子を、よくぞフォローできたものだと逆に感心することしきり。あるいは、パーカッション・シンセの導入や、ストロボ

付きの回転ドラム・セットに代表されるヴィジュアル面の強調などは、自らのプレイに対する自信の無さの表われだったのかも知れない。

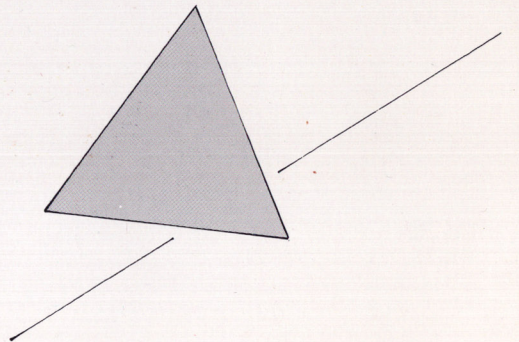
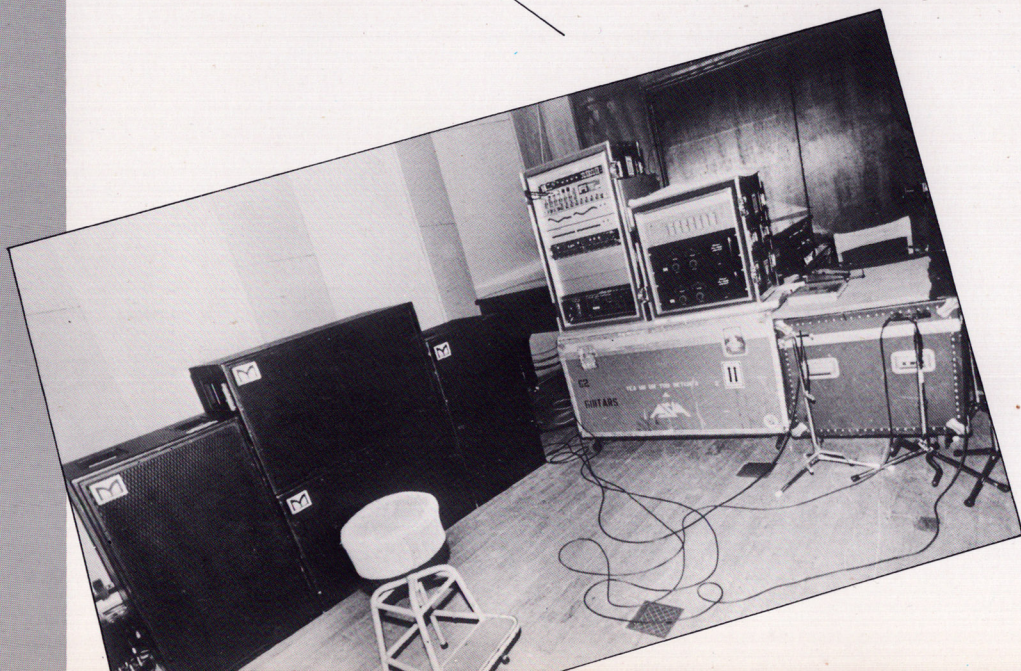
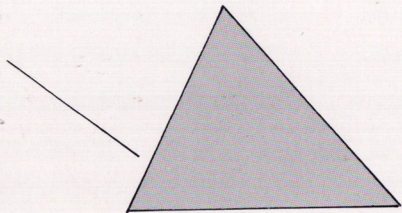
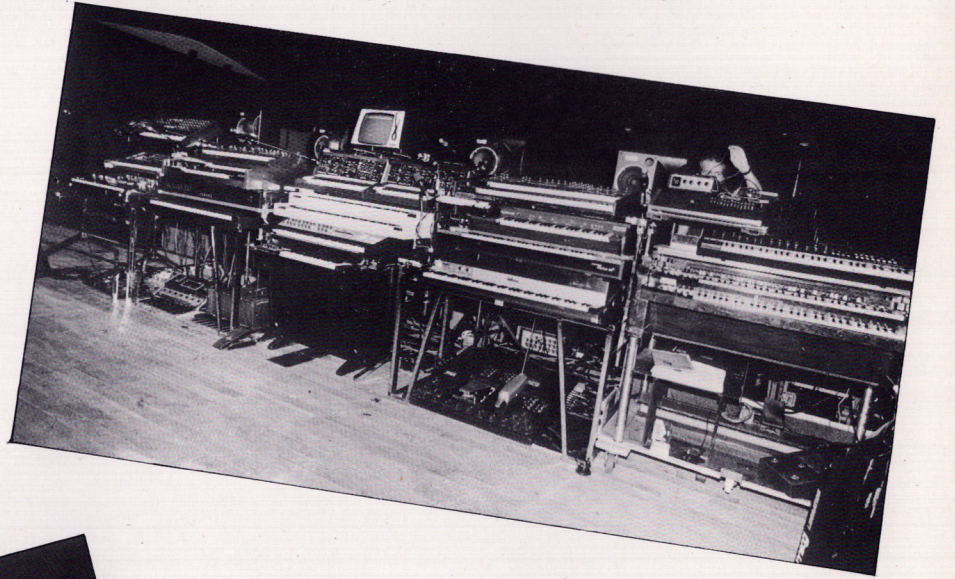
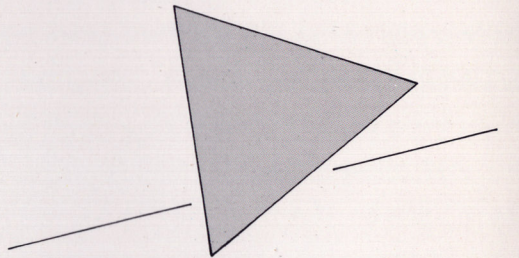
ところが、ELP解散後、自らのリーダー・バンド、P. M.('79年3月~80年7月)を経て、エイジアを旗上げる頃には、他のメンバーと真っ向から張り合うべく、それまで無駄な気負いを注ぎ込んできた、ある種のテクニック至上主義がすんなりと消え去り、ようやく安定路線へと転換。ライブ・パフォーマンス同様、スタジオ・ワークにおいても、ごくシンプル、かつナチュラルなドラミングを、その後の斬新な機械操作によって、よりダイナミックに助長させる手法を会得し、従来になくリラックス・ムードに溢れた、タイトなりズム・キープを披露するに至る。

■さて、しんがりは、先頃、ジョン・ウェットンに代わって、エイジアに新加入、この日本公演が事実上のお披露目ステージとなる、御大グレッグ・レイク。プロのピアニストとしてならした母親よりのプレゼントと伝えられる中古ギターをかかえ、幼少時代から、あのキング・クリムゾンの頭脳、ロバート・フリップと同じ教師に付いて、クラシック・ギターのレッスンに勤しんだのは、あまりにも有名なエピソードだ。そして、ミドル・スクール卒業と同時に、一旦は製図書きの職に付くも、自らのリーダー・バンド、ザ・シャイリムス結成を機にプロへと転身。その後、思うところあってギターをベースに持ちかえ、今や伝説のハード・ロック・バンド、ザ・ゴッズ('67年9月~68年8月)を経て、旧友ロバート・フリップが主宰するオリジナル・キング・クリムゾン('69年1月~70年3月)の一角を形成する。この奇才集団が世に送り出した、世紀の傑作『クリムゾン・キングの宮殿』において、グレッグは、まず、ジャズ色濃い驚異のベース・ランニン

グを力強く初公開。同時に、透明感に満ちたエモーショナルなクリスタル・ヴォイスによって、英国ロック・シーンきっての名ヴォーカリストとの圧倒的な評価を獲得するに至る。

次いで、ELP(70年6月~78年12月)。ギタリスト不在のトリオという前提を踏まえ、いよいよ彼のソリッド、かつ重厚なベース・ラインは、あたかもメロディ楽器のごとく、縦横無尽に疾走し、キースの多彩な音楽的アプローチをスリリングに挑発。時折聴かせる繊細なアコースティック・ギターの調べも、ELPにとって絶対不可欠の特性へと、みるみるうちに申し上がる。

ELP解散後、しばしの沈黙を余儀なくされたグレッグの次なるプロジェクトは、勿論、ゲイリー・ムーアやテッド・マッケンナらを率いてのグレッグ・レイク・バンド(81年6月~82年4月)。トリストラム・マーゲッツにベース・パートを委ね、あくまでもストラトキャスターを携えたヴォーカリストに専念するその柔軟性は、2枚のリーダー・アルバム、あるいは81年8月のレディング・フェスティバルにおいても、立派に実証済み。時代遅れとなじられようとも、西洋人とは思えぬ日本人の感性にピタリとフィットした、哀愁味溢れる幻想的な旋律を一貫して繰り出すグレッグの確かなソング・ライティング・テクニックは、エイジアのサウンド・プロダクションをも容易にくつがえす可能性を秘めているといえよう。











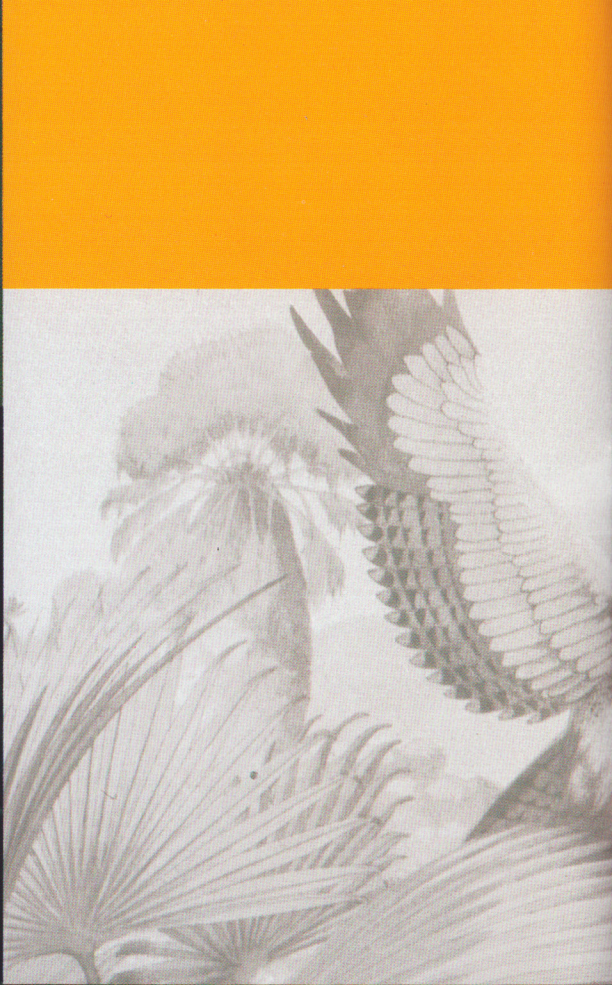
ブリヂストンが生むドラマに酔ってほしい。

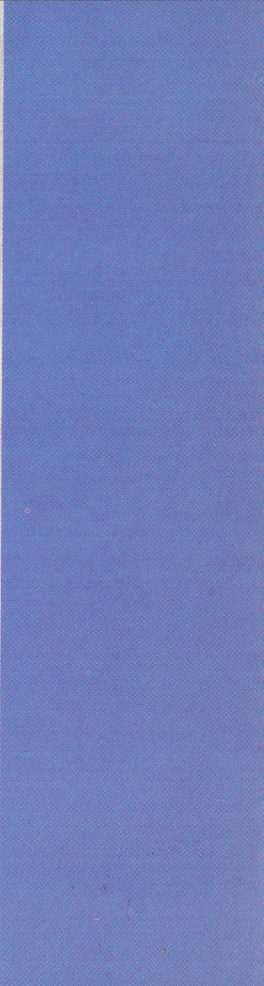


ARTNER

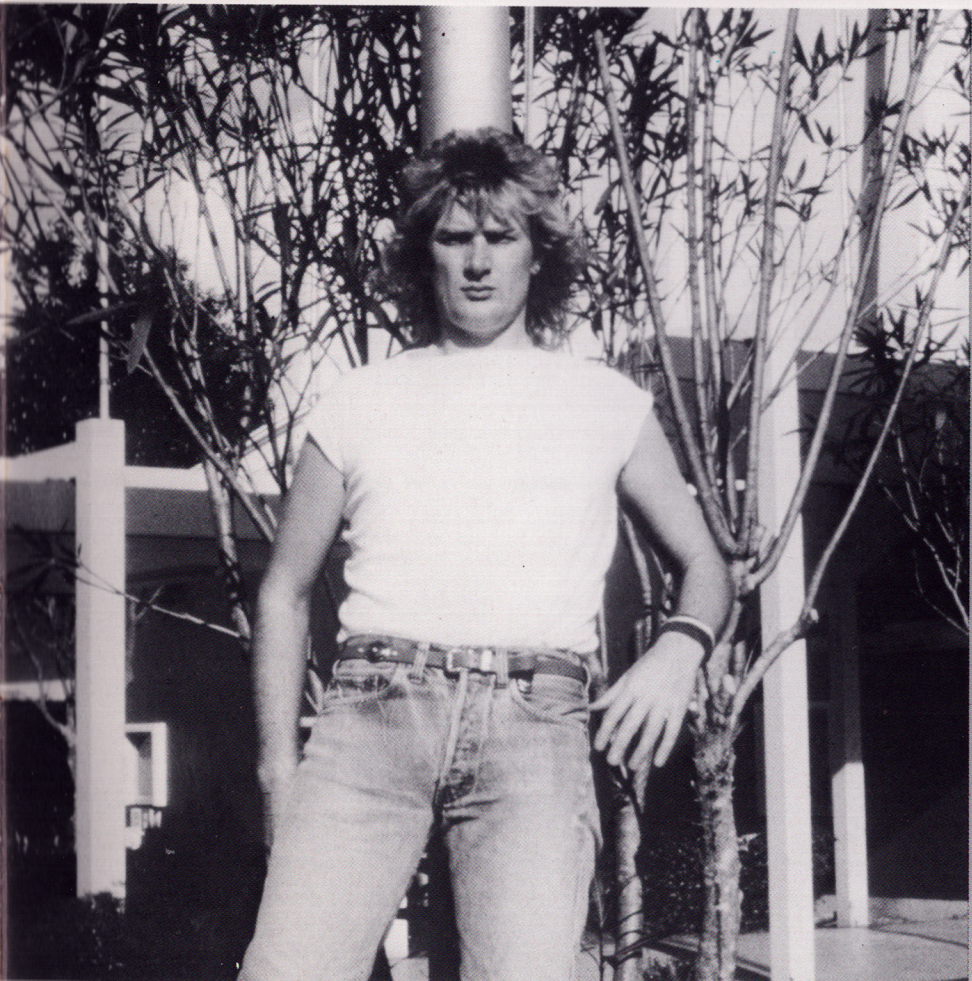
24

リアル・スポーツ POTENZA
from **BRIDGESTONE**











STEVE HOWE EQUIPMENT

4Gibson ES Artist Guitars

Danelectro Sitar Guitar

1Martin 0018 Acoustic Guitar

4 2x12" J.B.L Speaker cabinets

2Fender Twin Reverb amps

1Custom made "Kelly" Electronics Pedal Board

1Electro Harmonixs Guitar Synth

1Yamaha Tuner

2Roland Delay Lines

1Eventide Harmonizer

1Survival Projects Quantizer

1Bel Flanger



CARL PALMER EQUIPMENT

6Premier Steel Tom Tom Drums

2Premier Steel Bass Drums

2Premier Snare Drums

2Premier Tympani Drums

2Paiste Gongs

Paiste Cymbals

3Symmons Electronic Drums

Reno Drumhead



GEOFF DOWNES EQUIPMENT

- 1Hammond Organ J122
- 1Hammond Organ B3
- 1Yamaha C.S.80
- 1Yamaha C.P.70 Piano
- 1Novatron
- 2Minimoog
- 1Fender Rhodes 73
- 1Hohner D6 Clavinet
- 1Solina String Machine
- 1Fairlight CMI
- 1Moog Liberation
- 1Linn Drum Computer
- 1Prophet 5
- 1Prophet 10
- 1Korg Poly Six
- 1Korg Mono/Poly
- 1P.P.G Wave 2.2
- Moog Taurus Pedals
- 1Memory Moog
- Prophet Poly sequencer
- Custom Built mixing & effects Terminal



GREG LAKE EQUIPMENT

Steinberger L-2 Fretted Bass

Steinberger L-2 Fretless Bass

Pre-CBS Fender Precision Bass

Alembic 8 String Bass

Takamine Acoustic 6 String Guitar

Takamine Acoustic 12 String Guitar

Power-Amps

Crossover Driving

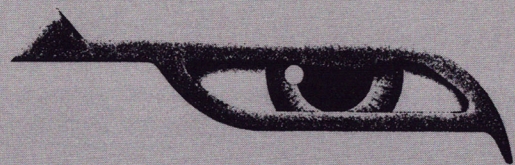
Martin Audio Custom Speaker System

Quark Control System

D.D.L.

Compressor

Chorus/Echo



グラハム・ボネット率いるニュー・バンド!
脱出不能のヘヴィ・ロック界

アルカトラス

ALCATRAZZ

■大阪公演

1月24日(火)フェスティバルホール6:30pm

S・¥4,000 A・¥3,000

お問い合わせ☎06(341)4506

■名古屋公演

1月26日(木)名古屋市公会堂6:30pm

お問い合わせ☎052(241)8111

■東京公演

1月29日(日)サンプラザホール<昼の部>3:00pm

1月29日(日)サンプラザホール<夜の部>6:30pm

S・¥3,900 A・¥3,000

お問い合わせ☎03(402)7281



驚異のギター・クレージー、熱狂ライブを再び!

ゲイリー・ムーア

GARY MOORE

■大阪公演

2月25日(土)フェスティバルホール6:30pm

S・¥4,000、A・¥3,000 お問い合わせ☎06(341)4506

■名古屋公演

2月28日(火)名古屋市公会堂6:30pm

S・¥3,900、A・¥3,000 お問い合わせ☎052(241)8111

■東京公演

2月29日(水)武道館大ホール6:30pm

S・¥3,900、A・¥3,000 お問い合わせ☎03(402)7281

ロック・ヴォーカリストの最高峰、初のソロ・コンサート

ロバート・プラント

ROBERT PLANT

■東京公演

2月19日(日)渋谷公会堂6:00pm

2月23日(木)サンプラザホール6:30pm

2月24日(金)サンプラザホール6:30pm

S・¥4,500、A・¥3,900、B・¥3,000 お問い合わせ☎03(402)7281

■大阪公演

2月20日(月)フェスティバルホール6:30pm

S・¥4,500、A・¥3,800、B・¥3,000 お問い合わせ☎06(341)4506

■名古屋公演

2月22日(水)名古屋市公会堂6:30pm

S・¥4,500、A・¥3,900 お問い合わせ☎052(241)8111

Let's ROCK

いつも音楽を感じていたいあなたに

Tシャツ・ALL ¥2,300

送料・1枚: ¥240 ・2枚: ¥350

アーティスト公認 TOUR-T-Shirts

●UDOとARTISTSがあなたにかわって手を結んだ
●UDOの招聘するアーティストのGOODSを独占販売



<今後発売予定のアーティスト> JOHN FOXF/SHEENA EASTON/U2/KID CREOLE/ASIA/NIGHT RANGER

ウドー音楽事務所

マーチャンダイズAS係
東京都港区南青山3-8-37
☎(03)403-4922

ご希望の商品・アーティスト名・サイズをご記入のうえ、
送料を添えて現金書留にて左記へお申込み下さい。

AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1983

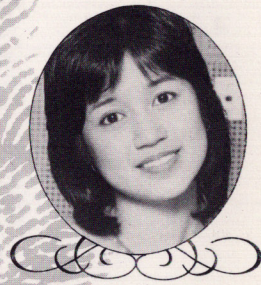
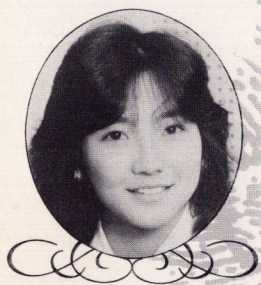
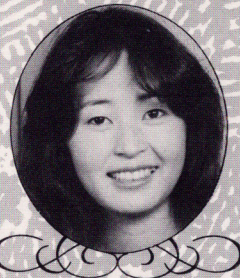
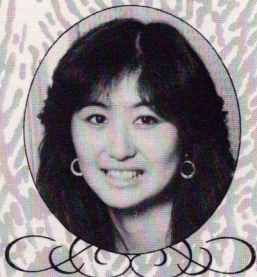


ウドー音楽事務所

東京都港区南青山3-8-37 第2宮忠ビルTEL03(402)7281 〒107
大阪市北区堂島2-1-27 桜橋千代田ビルTEL06(341)4506 〒530

夜をひろげる

MISS DJ

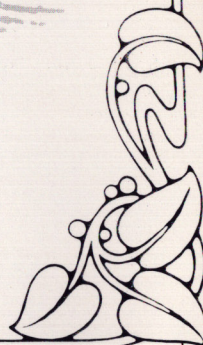
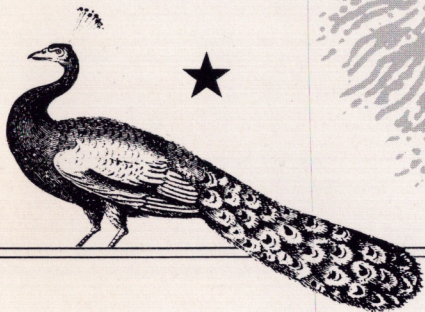
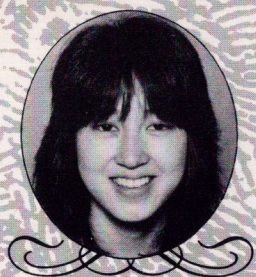
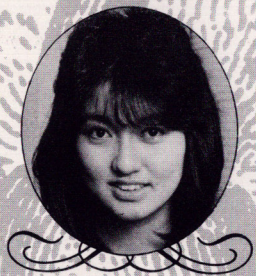
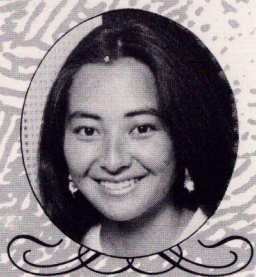


ロッキュベーション・コンサート
最新インフォメーションが聞けるぞ。

ミスDJ リクエストパレード

(月)―(金) 深夜0:30～3:00

DJ:(月)向井亜紀(火)斎藤慶子(水)宮坂久美子(木)篠山久美(金)千倉真理
キャンキャンレポーター:長谷川由美、福島美佐子、波多えつ子



ラジオはダイヤル 1134
文化放送

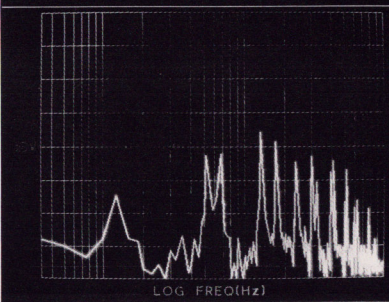
YAMAHA DIGITAL PROGRAMMABLE ALGORITHM SYNTHESIZER DX7

リアル&ナチュラル ヒューマンサウンドの デジタルシンセサイザー

ヒューマンなデジタルノウハウを実現したDXシリーズシンセサイザー

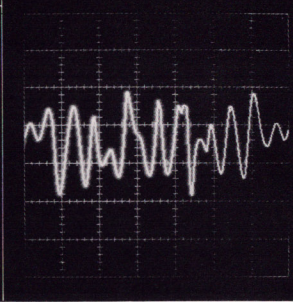
結婚の儀式を知らせる教会の鐘。年の移り変わりを知らせる除夜の鐘。そして、時を告げる学校のチャイム。金属を叩く音には不思議に人の心に染み込むような透明な情感があります。心躍り、あるいは、心和む独特の響き。不規則な倍音の要素が多いため音程感が少なく、それがかえって透明な響きに結びついているのです。実はこのような金属音は、いまだシンセサイザープログラマーのひとつのテーマでした。少なくとも、VCO・VCF・VCAおよびEGからなる、いわゆるアナログ方式では表現しきれない音色ニュアンス。言い換えるならシンセサイザープログラマーの腕のみせどころでもあったのです。ところが、オールデジタルのDXシリーズシンセサイザーに採用したFM音源システムでは、こうした金属音系の楽器音は得意中の得意。さらには、ブレスの感覚を持った管楽器音、擦弦音を交えた弦楽器音など、不規則倍音をも含むリアルな音色ニュアンスが、いとも簡単に、しかもロジカルにシンセサイズできるのです。もちろん、シンセサイザーにおけるデジタルテクノロジーの最大の目的は、機能の拡張と演奏性の向上にあることは言うまでもありません。しかし、もうひとつ忘れてはならないモチーフが、こうした生き生きとした音色、情感豊かなサウンドをつくることなのです。一見、アンチヒューマンなイメージの強いデジタルテクノロジーをもってはじめて、人間的でナチュラルな音色がつけれる。このセンセーショナルでアイロニカルな事実。これこそが、従来のシンセサイザーの常識をことごとく塗り変えていくのです。

図1 DX7「TUBULAR BELLS」の周波数スペクトル



図はコンピュータグラフィクスで処理しました。画面内の不連続点はグラフィクスの特性によるものです。

図2 DX7「TUBULAR BELLS」の波形

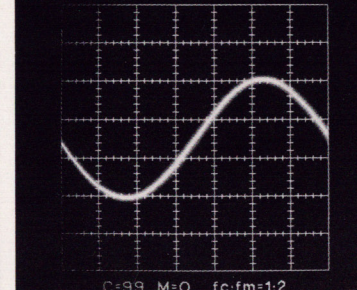


複雑な波形・音色を自由にプログラムできるFM音源システム

FM音源システムは、周波数変調を利用して複雑な倍音を含む音声信号をつくる最新技術。FMそのものは放送でも知られている一般的テクノロジーながら、楽器音源に導入するにはきわめて高度なデジタルノウハウが必要で、実は、製品化に成功したのは国内ではヤマハだけ。つまり、透明な金属音もリアルなブレス音も、DXならではのメリットなのです。FM＝周波数変調とは、音声信号(キャリア)のピッチを変調信号(モジュレータ)で揺らしてやる技術ですが、例えば、十分に低いピッチのモジュレータでキャリアにFMをかけてやると、ビブラートが得られます。さて、モジュレータピッチを高くして、キャリアピッチに近づけると、どうなるか。面白いことに、もとのキャリアにはなかった倍音が多数発生して、複雑な波形に変わります。これがFM音源の原理。発生する倍音はキャリアとモジュレータの

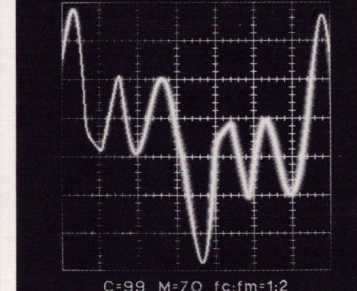
ピッチの比により自由にコントロールできますから、従来のアナログ型音源からは得ることのできない、実にさまざまな音色・波形を簡単に作りだすことができます。ちょっとした実験をしてみました。DX7の6つの音源回路のうち2つを使って、FMによるキャリア(C)の波形の変化をのぞいてみたのが図3～5。モジュレータ(M)のレベルが0の時、すなわちFMオフの場合には、キャリアの波形は何の変哲もない正弦波ですが、モジュレータのレベルを70、85というように上げていくと、次第に多くの倍音成分が発生し、波形が複雑になっていくのがはっきり示されています。従来のアナログ型音源の音源信号は、矩形波や鋸歯状波といったシンプルで規則的な波形でしたが、FM音源では、このように複雑でアコースティックな完成度の高い音色を自由にプログラムすることができます。しかもDX7には、キャリアにもモジュレータにも使える音源回路が6基装備されており、その組み合わせ、すなわちアルゴリズムは実に32種類。このことだけでも、FM音源を使った

図3 モジュレータレベル0の場合のキャリア波形



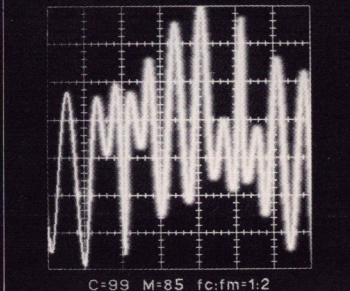
C=99 M=0 fc:fm=1:2

図4 モジュレータレベル70の場合のキャリア波形



C=99 M=70 fc:fm=1:2

図5 モジュレータレベル85の場合のキャリア波形



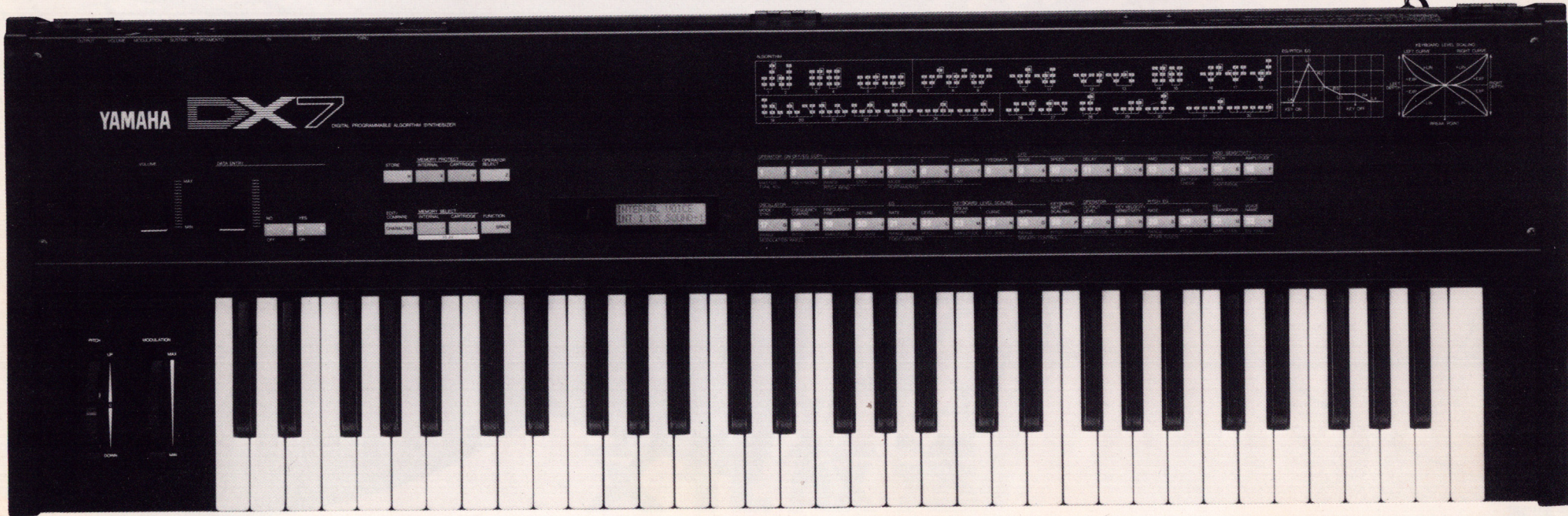
C=99 M=85 fc:fm=1:2

図はコンピュータグラフィクスで処理しました。画面内の不連続点はグラフィクスの特性によるものです。

DX7 ¥248,000

- 鍵盤=61鍵・16音ポリフォニック
- FM音源=6オペレータ・32アルゴリズム
- メモリー機能=32内部音色メモリー (ROMカートリッジ装着時96音色メモリー)
- デジタルEG=8パラメーター (レベル×6、ピッチ×1)
- キーボードスケール機能=レベルスケール、レイトスケール
- エフェクト=キーベロシティセンシティブリティ、ピッチベンド、ポルタメント/グリッサンド、モジュレーションホイール (音色・音量・モジュレーション)、フットコントロール (音色・音量・モジュレーション)、アフタータッチ (音色・音量・モジュレーション)、ブレスコントローラー (音色・音量・モジュレーション)
- MIDI端子装備
- リモートキーボード KX1 (¥200,000) 接続可能
- ブレスコントローラー BC-1 (¥3,000) 接続可能

YAMAHA 日本楽器製造株式会社



キミ、そりや間違ってる。

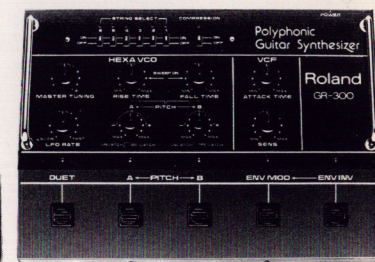
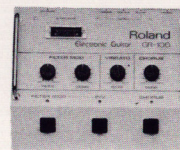
G-505はエレキ・ギターである。

間違いじゃありません。ギター・シンセとして知る人ぞ知るGRギター・システム。そのギター・コントローラーG-505。難しそうな名前がついていますが、アンプとダイレクトにセッティングすれば、ノーマルなエレキ・ギターとしてプレイできます。セン単板ボディに、メイプル・ワンピースのデタッチャブル・ネック。シングル・コイル・ピックアップを3基マウントし、5ポジション・セレクターによるカラフルなサウンド・バリエーションが弾き出せます。

そのハイ・レベルな仕上げと、ブリリアン
トなトーン・キャラクターで、多くのプロ・ギタリストを魅了しています。

G-505はギター・シンセである。

間違いじゃありません。6本の弦の音を、それぞれ独立してピックアップできるデバイデッド・ピックアップと、先進の電子回路を内蔵したG-505。専用24ピン・コードで別売シンセサイザー・ユニットGR-300とジョイントすれば、和音プレイのできる6音ポリフォニック・ギター・シンセサイザーへとシステム・アップ。いままでの奏法を変えることなく、ギターならではの抑揚を生かした、スケール感のあるシンセ・サウンドが弾き出せます。さらに別売ユニットGR-100となら、6つの独立した回路で表情豊かな音創りができるエレクトロニック・ギターに。コードを弾いたときのニゴリのない音は必聴ものです。



GUITAR SYNTHESIZER UNIT GR-300 ¥119,000
ELECTRONIC GUITAR UNIT GR-100 ¥69,500



GUITAR CONTROLLER
G-505 ¥100,000 (専用ケース ¥10,000)

Roland

●カタログご希望の方は機種を明記の上200円切手を同封して
〒559 大阪市住之江区新北島3-7-13 ローランド株式会社販企課UD0係まで。

全身で立ちむかえ！
こちらの要求はそれだけだ。



どんなにしこたま
金をもっていよう
が、甘いルックス
で女を引きつけ
続けていようが、
出るとこへ出て腰
の引けるような男は願い下げおこう。
RB、ことわっておくが、ほどほどに、とか、
適当に、とかの概念はさらさらしない。
意気に感じ、すすんで危険に身をさらす
真のダンディにこそふさわしい一本、と
考える。
ストラップを肩にまわし、ネックを握った
瞬間、あなたは自分の中に“野性”が
胎動を始めるのに立会う。そして幸か
不幸かは知らないが、ついに自分の
本当の力を知ることになる。RB'83年
型偶像破壊システム、3タイプ。
全身で立ち向っていただきたい。
ほどなく、男の世界をお見せできる。

Ibanez

RB820SS ¥60,000 RB920BS ¥70,000 RB924SS ¥80,000 (PHOTO) (いずれも本体のみ)

カタログ御希望の方は切手300円同封の上、(住所、氏名、TELを明記) 〒489愛知県瀬戸市東長根町119私書箱瀬戸36星野楽器販売株式会社U係までお送り下さい。

ASIA 幻想

エイジアの発表した巨大な2枚のアルバムは、ロックの流れを変えただろうか?たぶん答は"NO"だ。彼らの創り出した音楽は、あまりにもエイジア独自のものだから…。ピンク・フロイドやマイルス・デイビスが孤高の世界を進み続けたように、エイジアも他の追随を許さないハイ・クオリティな音楽を生み続ける。ライブであれ、アルバムであれ、最初の一音からぼくたちは壮大なサウンドのパノラマに包まれてしまう。これは、現代に残された数少ないロマン。緻密で、前衛的なイントロから超POPなメロディが生まれる瞬間は、いつもスリリングだ。今回の来日を前に、ベースがジョン・ウェットンからグレッグ・レイクに交代。新生エイジアの凄さは、このステージで明らかだ。今後も要注目!

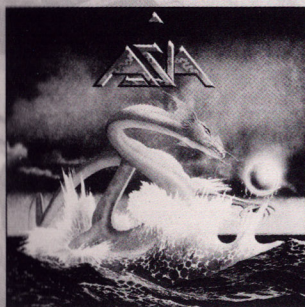
12.7.1983 LIVE ASIA in ASIA ロック史上初、全世界へ衛星生中継!

エイジアの12月7日の武道館ライブは、テレビとラジオで、全世界に衛星生中継される。ステージの同時中継は、史上初の大イベントだ。

ロックに一大エポックを画した
デビュー・アルバム。

詠時感 ~時へのロマン

- ヒート・オブ・ザ・モーメント/時へのロマン他全9曲
- 25AP2299 ●カセット25KP810 各 ¥2,500
- コンパクト・ディスク35DP25 ¥3,500



ベストセラーを快走する
来日記念2ndアルバム。

アルファ

- ドント・クライ/いつわりの微笑み他全10曲
- 25AP2650 ●カセット25KP970 各 ¥2,500
- コンパクト・ディスク35DP80 ¥3,500



ビクター・ディスクでも新登場!

アルファ (完全限定盤)

- エイジア・フリークに贈る特別企画。
R.ティーンのイラストによる永久保存盤。
- オリジナル・ジャケット・ピンナップ付
- 30AP2699 ¥3,000





AN UDO ARTISTS PRESENTATION 1983 ROCKUPATION '83 第20弾

